

朝のこない夜はない

山首 鈴木正修



はたら
働くことによつて

こころ
心を磨きましよう

『始祖・御法話集』の一番初めに「出世の意義」という
ご法話があります。

「皆様方はどなたも出世がしたいと思われるでしょう。
さて、出世とは如何なることを希うことかと申せば、万
人に愛され、立派な家に住み、資産も富有にして、男子
なれば八方美人の慈悲深き良妻を娶り、賢き子どもを得
て、いずれも立派に教育し、すべてに満足し、喜びのう
ちに八十才、百才までも長生きし、死しては金色と紫の
無上道に到る、これなれば誠の幸福でありましよう。だ



れも願う極樂でしよう。この極樂、あるいは宝の山に到るには、申すまでもなく行く道がなくてはなりません。この道を学び、実行して幸福を得、出世をして世間の人々にその範を示し、絶大なる妙法の偉力を国内はおろか、海外にまで宣伝流布せしめんとするのが、仏教感化救済会の目的であります」

その具体的な方法として、杉山先生は「第一に、精を出して働きましょう」と言われます。続けて「段々世の中が複雑になってくるにしたがって、真面目さがなくなり、怠け者が増えてきます。今の人間は、働くことに対して苦痛であるが如く考える者さえあります。我々会員は、そういう考えは全然やめにして、働くことは楽しみだ、という考え方に改めましょう。お互いの目的を忘れず、お互いの仕事に興味をもって、身を惜しまず働きます



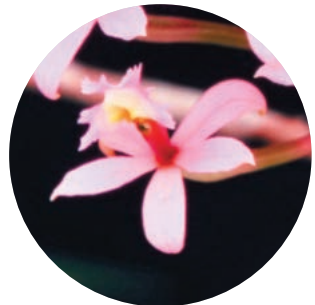
しよう」と言われています。百年以上前、杉山先生は「怠け者が増えてくるから気をつけなければいけない」と言われているのです。

昨今、「働き方改革」が声高に言われています。国際的に見ると日本の長時間労働は問題で、特に働き盛りの30〜40代の長時間労働の割合が深刻な状態だそうです。ですから労働時間を短くすることが重要視されています。労働時間が長すぎれば、すぐに「ブラック企業」と言われ、人が集まりません。労働時間がとても気にされる時代になっていきます。こんな話を聞きました。仕事の終業時間を少し過ぎて会議をしていると、若い社員が上司に「残業手当はつくのですか」と尋ねたと言います。上司が「これはつかないよ」と言うと、若い社員はがっかりしていたそうです。そういう時代になってきています。



発明王エジソンにまつわるお話です。エジソンは今の
労働時間などという考え方とは真逆で、時間を気にした
ことがない人でした。睡眠時間も三、四時間程だったそ
うです。食事は奥さんができたてを研究室の机に置いて
おくのですが、研究に没頭するあまり、いつも冷め切っ
てから食べていたそうです。また、寝室のベッドで寝た
ことがなかったそうです。研究室のソファで横になる
だけで、ベッドでちゃんと寝るようになったのは、70歳
を過ぎてからだと言います。

そんなエジソンのところに友人が息子を連れてきて、
「エジソンさん、これは私の息子ですが、学校を卒業し
これから世間に出ようというのです。それについて何か
一つ心得になることをお聞かせ願えないですか」と言
いました。するとエジソンは頷いて、青年と握手をし、研



研究室きやうしつにかかっている大きな時計とけいを指さして言いいました。
「決けつして時計とけいを見みてはいけない。これが若い人達わかひとたちが一番ばん覚おぼえておくべき、私の忠告ちゆうこくである」

これは、立派りっぱな仕事を成なし遂とげるには時間じかんを気きにしてい
てはできない、というエジソンの教訓きょうくんです。「寝食しんしょくを
忘わすれる」という言葉ことばがありますが、文字通りエジソンは
その実践者じっせんしやでした。

私は長時間労働ちやうじかんろうどうを是ぜとしている訳わけではありませんが、
働くということことに関しては、杉山先生すぎやませんせいのように考かんがえた方ほう
が良いと思おもっています。

日本人にほんじんは昔むかしから「働くことは美德びとくである」とし、辛つら
いこともあるけれど、喜びよろこびや生き甲斐がいを得えられるのは働はたら
くことからである、と考かんがえてきました。また、働はたらくこ



とによって心が磨かれ、人格が陶冶される。とも考えます。仏教ではこれを「精進」といいます。

現代の経営の神さま、稲盛和夫さんの書かれた『働き方』(※)という本があります。その中には「働くことは美徳である」という意味の話が全編にわたって書かれています。その中から「働くことは万病に効く薬である」という話を紹介します。

稲盛さんは若い頃、多くの挫折を経験されました。まず中学受験に失敗し、その後、結核に罹って死線をさまよっておられます。再度の中学受験にも失敗し、戦災で家を焼かれ、大学の受験にも失敗しました。就職の時には、大手企業に入りたいと願いながら、うまくいかず京都の小さな碍子の会社に就職することになりました。その会



社では給料がほとんど遅配でした。もらえない時もあつたようです。

23歳の稲盛さんは、なぜ自分にはこんなに次々と、苦難や不幸が降りかかってくるのだろう。この先、自分の人生はようになっていくのだろう。と自分の運命を嘆いたそうです。しかし、たった一つのこと、運命は変わったのです。それは、ただただ一生懸命に働くということ、です。苦難や挫折ばかりだった人生が信じられない程、希望にあふれたものに変貌を遂げたのです。

稲盛さんは言われます。

「今、働く意義を理解しないまま仕事に就いて、悩み、傷つき、嘆いている方があるかもしれません。そのような方には、働くということは、試練を克服し、運命を好転させてくれる、まさに万病に効く薬なのだということ



を、ぜひ理解していただきしたいと思います。そして、今の自分の仕事に、もっと前向きに、できれば無我夢中になるまで打ち込んでみてください。そうすれば必ず、苦難や挫折を克服することができるようになるばかりか、想像もなかったような、新しい未来が開けてくるはずですよ」

私は、稲盛さんのような考え方は日本人の魂に染まっているもののように感じます。

昔から今に至るまで日本人の働くことへの思いは変わっていないと思います。

『奇跡体験！アンビリバボー』というテレビ番組で、ウズベキスタンに、ナヴォイ劇場という日本人がつくった立派な劇場があるという話が放送されました。ウズベキスタンは旧ソ連の国です。ナヴォイ劇場は旧ソ連時代に



完成かんせいしました。日本にほんは1945年8月15日がつにちしゅうせんに終戦しゅうせんを迎え
ますが、その直前ちやくぜんにソ連れんが旧満州国きゅうまんしゅうこくに侵攻しんこうしてきて、多
くの日本人にほんじんが極寒ごくかんのシベリアに抑留よくりゅうされました。その数かず
は約65万人にんと言いわれています。そのうちの2万5千人にんが、
旧ソ連きゅうれんのウズベキスタンに連つれて行いかれ、強制労働きやうせいろうどうをさ
せられました。そこで作つくられたのがナヴォイ劇場げきじやうです。
工事中こうじちゆうに79人にんの方が亡なくなりました。そんな中なか、リーダ
ーが「私達わたしたちは日本人にほんじんだ。日本人にほんじんの誇りほこをもって働はたらこうで
はないか。そして必かならず日本にほんに帰かえってもう一度桜どよくらを見みよう」
と言いって皆みなを鼓舞こぶし、劇場げきじやうは完成かんせいしたのです。強制労働きやうせいろうどう
にもかかわらず、真剣しんけんに仕事しごとに取り組くむ日本人にほんじんの姿すがたに、
当時とうじを知るウズベキスタン人じんが「日本人にほんじんの捕虜ほりよは、本当ほんとう
に正々堂々せいせいどうどうとしていた。ドイツ人捕虜じんほりよが待遇改善たいぐうかいぜんばかり
を叫さけんでいたのに対たいして、日本人にほんじんはサムライの精神せいしんを持も



っていた」と語っています。

三年はかかると思われた作業が驚異的な速さで進み、わずかに二年足らずで完成しました。強制労働なのに、細部の彫刻に到るまで手の込んだ仕事をし、完璧な出来栄でした。二十年後、ウズベキスタンを震度5の大地震が襲いました。首都タシュケントの建物の三分の二にあたる7万8千棟が倒壊しました。ところがナヴォイ劇場はびくともしなかったのです。そればかりでなく市民達の避難場所となつて多くの命を救いました。今もウズベキスタンの人達はナヴォイ劇場を見上げて「戦いに敗れても日本人は誇りを失うことなく、骨身を惜しまず働いて、立派な仕事を残した。すばらしい民族だ」と言うそうです。現在、抑留された日本人の立派な仕事のお陰で日本とウズベキスタンは大変良い関係になっています。



最後にもう一つ心うたれる話を紹介します。麻生副総
理が外務大臣をされていた時、インドの首都ニューデリ
ーに滞在中に、できたばかりの地下鉄を視察されました。
日本からのODA（政府開発援助）でその地下鉄は建設
されました。日本とインドの大きな国旗が地下鉄の駅
入り口に掲げてあり、改札口には大きな円グラフが表示
され、建設費の70%が日本の援助であると思われるよう
色分けされていました。麻生さんがそれを見て「ありが
とうございます」と言うと、インドの技術者のトップだ
った地下鉄公団の総裁は次のように言ったそうです。
「お礼を言われるなんてとんでもない。もう感謝、感謝
です。最初の現場説明の際の集合時間が8時でした。集
合時間の少し前に現場に行ったら、日本から派遣された
技術者はすでに全員作業服に着替えて並んでいました。



我々インドの技術者は、それから数十分以上かかって全員が集まりました。日本の技術者は誰一人文句を言わずに整列して待っていました。自分が『全員揃った』と報告すると、『8時集合ということは8時から作業できるようにするのがあたりまえです』と言われました。悔しいので翌日は7時45分に行くと、日本人はもう全員揃っていました。以後、このプロジェクトが終わるまで日本人が常に言っていたのが『納期』という言葉でした。決められた工程どおり終えられるように、一日も遅れてはならないと徹底的に説かれました。そしていつのまにか我々も『ノーク』という言葉を使うようになりました。これだけ大きなプロジェクトが予定よりも2カ月半も早く完成しました。もちろん、そんなことはインドでは初めてのことでした。翌日からは運行担当の日本人がやっ



てきました。彼らが手にしていたのはストップウォッチでした。これで地下鉄を時間通りに運行するように言われました。秒単位まで意識して運行するために、徹底して毎日訓練を受けました。その結果、それまでインドでは数時間遅れがあたりまえのようになっていましたが、現在インドの公共交通機関で地下鉄だけが数分の誤差で運行されているのです。我々がこのプロジェクトを通じて日本から得たものは、資金援助や技術援助だけではなく、最も影響を受けたのは、働くことについて、価値観、労働の美徳です。労働に関する自分達の価値観が根底から覆されました。日本の文化そのものが最大のプレゼントだったのです。インドでは今、この地下鉄をベストアンバサダー(最高の大使)と呼んでいます」

麻生さんはこの話に感銘を受け、「地下鉄建設に携わ



った日本人技術者達の仕事ぶりそのものが、優れた外交官の役割を果たしたのです。彼らは何もよそ行きのやり方をやって見せたものではありません。いつものように、日本で普通に行っているスタイルで仕事をしたに過ぎないのです。しかしそれが、インドの人々には価値観が覆るほどの衝撃だったのです。日本人の勤勉さは、私達が思っている以上にすばらしい美徳なのだと思います」と話されています。私もその通りだと思っています。

※『働き方』

著者 稲盛和夫

発行者 押鐘太陽

出版社 株式会社三笠書房

